イケチョウガイの貝殻でスタイリッシュなジュエリーを。若い世代への提案。

貝殻の粉末を溶けたガラスに取り込む方法とは別に、貝殻をデザインカット、鏡面研磨することで、パールのやさしい煌めきを放つアクセサリーの試作を進めています。
今回はジュエリーデザイナーの後藤さんと共同で進めるために黒壁スクエアでごあいさつと打ち合わせを行いました。

北村　まず最初に経歴をお伺いします。
後藤　18歳の時に函館の大谷学園を卒業しました。その時の進路の先生に「普段何もしてないときは何をしてるの？」と聞かれ、色を組み合わせたり洋服をいろいろ触ったりすることが好きだったので、服飾の方でやってみようかなと思いました。「函館ドレメ服飾学園」にデザイナー助手で入社し、その後デザイナーの勉強するため東京へ出てきました。それから結婚・退職し、子育てがひと段落したときに何かしたいなと思って、「オンワード」に販売職として勤めました。婦人服の販売をやってるうちに、立ち仕事をするのはどうかと思って、事務や企画を覚えるようになったんです。
しばらくして、自分で婦人服の卸をやりだしたんです。そうしているうちに20年位たって、アクセサリーメーカーの「エースクラフト」に入社しました。そのとき、ビーズ等の「光る物」に出会ったんです。なんて綺麗なものがあるんだろうと思って夢中になりました。そのため普通だったら一人の先生について勉強するところを、三人くらいの先生に毎日通ったんですね。
オンワードに入る前に、平田暁夫先生という皇室の帽子を作ってる方のところに3年間通ってたんです。従来の日本の感じで色を出すと、どうしても「わび・さび」っていうかちょっとくすんだ色になるんですよ。ところが先生はそれを見て「なんて汚いんだ」って言うんです。先生の作る物はものすごい透明感があってクリアなんですよ。こういう色を先生は必要としてるんだなって、今までの考え方と180度変わっちゃいました。その経験が今でも仕入れとかデザインを起こすときの基礎となってるんだなって思ってます。
北村　アクセサリーに進むきっかけとなった、ビーズ等の「キラキラしたもの」との出会いについて具体的にお願いします。
後藤　婦人服の会社でブティックをしたときに、その時のお客様がビーズを持ってらしたんです。それまでビーズというのは子供のおもちゃと思っていましたが、手に取って触らせて頂いたらびっくりするくらいしなやかで。ビーズというのは色がすごいですね。
ちょっとの組合せでものすごく変わっちゃうんです。それで魅せられたというか、『洋服をすべてやめてもいいかな』って思うくらいのめり込んじゃいました。それがきっかけですね。

北村　たまたまそのお客さんと出会って、その人がつけていたアクセサリーがですか？
後藤　ええ、そうです。
北村　個人的に好きなアクセサリーの種類はどのようなものがありますか？
後藤　GIVENCHYっていうフランスのデザイン。その人のデザインやアクセサリーがすごく好きですね。
北村　今回貝殻を使ったアクセサリーをデザインしていただくのですが、今までに貝殻を使ってアクセサリーを作られたことはありますか？
後藤　無いです。今回が初めてです。
北村　現段階で、貝殻を使って出来そうなもののイメージをお持ちですか？
後藤　ええ、何点か。最初は雲を掴むような話で想像できなかったんですけど、ここ長浜に来て、いろいろな資料を見せて頂いたりしているうちに、こういう風なデザインもありかなとか。それから今までやってきたビーズのデザインと組み合わせるにはこういうのがいいかなというのが少しずつ。
北村　ありがとうございます。最後に、今回のイケチョウガイを使ったアクセサリー作りという事業について思いをひとことお願いします。
後藤　長浜というところは私にとって身近な街ではなかったんですけど、街自体の雰囲気がなんか疲れないんですよね。それで、一生懸命琵琶湖のイケチョウガイの復活とかやってる人の姿勢を見て、こういう方と一緒に仕事できるんだったら私も何かお手伝いの一つにでもなればと思って考えています。
北村　ありがとうございます。今後も引き続きよろしくお願いします。
後藤　こちらこそ、よろしくお願いします。

（つづく）